

徳川後期における地方廻船の貨幣取引に関する分析 ： 肥後国天草の石本家廻船を事例に

齋藤, 和平
九州大学大学院経済学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1799315>

出版情報 : 経済論究. 157, pp.19-35, 2017-03-24. Kyushu Daigaku Daigakuin Keizaigakukai
バージョン :
権利関係 :

徳川後期における地方廻船の貨幣取引に関する分析

— 肥後国天草の石本家廻船を事例に —

A Study of Money Trades by the Regional Cargo Vessels in Late Tokugawa Period:

A Case Study on the Cargo Vessels of Ishimoto

齋 藤 和 平[†]
Saito Kazuhei

はじめに

本論文の目的は、徳川期肥後国天草において様々な事業を営んだ天草石本家の海運業（以下、石本家廻船とする）、とくに船を用いた貨幣取引に注目し考察することで、石本家廻船の実態解明を進める点にある。

汽船や鉄道といった近代的な輸送手段が存在しない徳川期において、遠隔地に大量の物資を運搬する輸送媒体として廻船は大きな役割を果たした。彼らは、江戸と大坂という中央市場間や、地方領国と中央市場間、そして地方市場間における多種多様な商品の移動に深く関わっており、地域間分業を特徴とする徳川期の社会構造を支えていた¹⁾。徳川社会を成立させる上で、海運業は必要不可欠な存在であったといえよう。

徳川期において大きな役割を果たした海運業に関しては、これまで各廻船の経営史料や客船帳などを用いて、主に流通史や経済史の分野で数多くの議論が行われてきた²⁾。とくに近年は、北前船や内海船といった18世紀末～19世紀にかけて遠隔地取引を行った新興海運業者の研究が進展した³⁾。その結果、北前船や内海船に代表される広範囲の航海圏を有す大規模廻船によって形成された全国的な商品流通網と船持ち商人の資本形成過程、そして近代日本へ与えた影響などが明らかにされた。

また、北前船や内海船のように全国レベルで活躍した海運業者の研究が行われると同時に、主にローカルな地域圏の取引で重要な役割を果たした地方廻船の研究も進展した⁴⁾。しかし、史料的制約もあり、本稿のように、18世紀中頃～19世紀中頃までのいわゆる徳川後期を対象とし、かつ帳簿などの経営史料を用いて個別廻船の経営実態を考察した九州地方廻船の研究は限定的である⁵⁾。そのため、上述した大規模廻船が形成した全国的な商品流通網と九州の地方廻船がどのように結びついていたという観点から、さらなる九州地方廻船研究の発展が必要である。

[†] 九州大学大学院経済学府博士後期課程

1) 宮本・上村 (1988)。

2) 代表的な研究として、上村 (1994)；石井編 (1995)；柚木 (1979) などがある。

3) 斎藤 (1994)；同 (2005)；中西 (2009)。

4) 近世期における九州地方を含む海運業者の活動を地域別にまとめたものとして、柚木 (1986-1996) が挙げられる。

5) 代表例として、中野 (1984)；同 (1988)；千々布 (1993)；豊田 (1993)；尾道 (1993)。

そんな中、石本家廻船に目を向けた楠本美智子の研究は、18世紀後半～19世紀前半における九州の海運業者の活動を分析したものとして大変貴重である⁶⁾。楠本は、1770～1830年代のうち41年分現存している石本家廻船の帳簿である「船勘定控帳」から5～10年ごとに史料を抽出し、同廻船の取引について分析を行った。楠本の研究により、穀物や燭蠟を中心とする九州産物を九州内で流通させると同時に、それらを中国地方や大坂で販売し、帰り荷として中国地方産の繰綿や大坂で雑貨・日用品を購入してくるという、石本家廻船による取引の概要が判明した。

石本家廻船は、研究事例が少ない徳川後期における九州地方廻船の実態を解明する上で、貴重な分析対象である。九州内にとどまらず瀬戸内海沿岸港や大坂にまで赴き取引を行った同廻船は、まさに同時期に活躍した北前船や内海船などの大規模廻船の活動、及び彼らが形成した広範な商品流通ネットワークと九州地方を結ぶ役割を担っていた存在になり得る。石本家廻船の詳細を究明することは、徳川期経済史研究において少なくない意義があろう。しかし、楠本の研究では、石本家廻船による活動の側面しか解明されておらず、同廻船についてなお一層の分析を加える必要がある。

そこで本稿では、石本家廻船による取引の中で、とくに貨幣の取引に着目し考察を行う。天草石本家は、廻船業を通じて九州内で貨幣の売買を行っていた。それは、取引額ベースで見ると、石本家廻船の活動で小さくない地位を占めていた。しかし、楠本の研究では、この貨幣取引に関してほとんど言及がされていない。それは、楠本の研究主眼が商品の流通にあったことは勿論だが、以下の分析手法上の問題があったからだと考える。楠本は、数年分という限定的ではあるものの、利用した「船勘定控帳」を丹念に読み解き取引内容を考察しているが、各年の取引額を合算する、あるいは商品ごと取引額を算出するなどの分析を行っていない。そのため、楠本の研究では石本家廻船全体や商品別の取引額の推移は明らかにされていない。その結果、取引額で見ると重要取引商品であった貨幣の存在が、見過ごされてきてしまったのである。

本論文では、第1章でまず天草石本家および石本家廻船の概略を論じ、本稿で使用する史料について説明する。第2章では、石本家廻船の活動を、楠本の研究では行われなかった商品別に取引額を算出し、その時系列的な変化を見ることで分析する。そして、同廻船が九州内で多額の貨幣取引を行っていたことを指摘する。それを受けて、第3章では石本家廻船がそのような貨幣取引を行えた背景を、長崎から天草石本家へ送られた書翰史料から考察する。そして、最後に石本廻船の貨幣取引の意義について論じる。

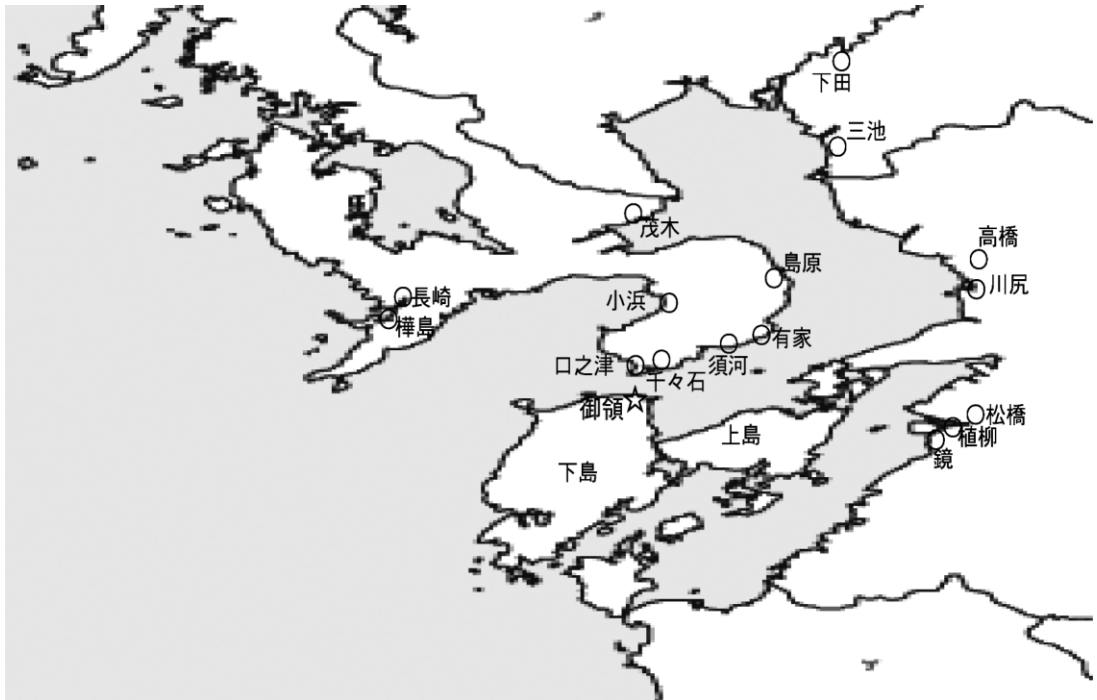
1 石本家廻船の概略と石本家文書「船勘定控帳」について

1.1 天草石本家略史

天草石本家は、長崎の町人で代々乙名を勤めていた長崎石本家を母体とする。正確な年代は不詳だが、寛永年間（1624～1643年）に長崎石本家から、当主の息子治兵衛が天草下島東北隅にある御領村に移住した(図1参照)。その後、百姓として御領村に居住する傍ら酒造業を営んだとされている。3

6) 楠本(2002)。

図1 天草周辺図



出典：報告者作成。

代・4代石本勝之丞が当主であった明和～寛政期（1764～1800年）は、天草石本家中興の時代とされる。この時期には、酒造業だけでなく、天草や島原の農民や村々に対する資金の貸し付けなどを行うようになった。また、1771（明和8）年に柳川藩に対して柳川藩御用達として銀10貫目を融資するなど、大名貸を開始した。同時に、土地集積を進め、地主としても大きな力を持つようになった。その他にも、天草石本家は、天草島内で製蠟業や製塩業を行い御領村に商店を構えるなど、多種多様な事業に進出した。その後、5代勝之丞・6代勝之丞の時代である文化～天保期（1804～1843年）に、天草石本家は最盛期を迎えた⁷⁾。この時期に天草石本家は、薩摩藩や人吉藩などの九州諸藩との結びつきを貸付や領国物産の販売などを通じて深めようとした⁸⁾。さらに同家は、1818（文政元）年に出身地である長崎に長崎松坂屋（松坂屋は天草石本家の屋号）を出店し、1822（文政5）年には入札株を取得して貿易品も取り扱うようになった⁹⁾。1834（天保5）年に5代勝之丞は、幕府勘定御用達に任命された。同役は、1838（天保9）年に6代勝之丞に引き継がれた。しかし、1842（天保13）年に高島秋帆が外国人と密かに交際していたことが発覚し検挙されると、当時の長崎代官高木作右衛門の娘が高橋秋帆の妻であることから、高木も取り調べを受けた。その際に天草における代官役所納戸金紛失事件の件（詳細不明）が表沙汰となり、代官所に入出入りしていた5代・6代勝之丞にも嫌疑がかかった。その

7) 五和町町史編纂委員会（2002），584-590頁。

8) 安藤保（2001）；宮崎（2001）。

9) 大村（1953）。

一 餅米三拾三俵 貳拾八匁かへ 代九百貳拾四匁	鏡問屋兵八より	買入
一 小豆拾八俵 三拾貳匁七分かへ 代五百八拾八匁六分	同人より	
一 本米四俵 貳拾八匁五分かへ 代百拾四匁	同人より	
一 表貳拾枚 貳匁六分かへ 代五拾貳匁 メ 壹貫六百七拾八匁六分	同人より	
引残 五百五拾貳匁七分一厘		
此丁銭 三拾八貫六百九拾文 (後略)		

「船勘定控帳」には、石本家廻船の出船・帰帆日時、船員の人数と名前、行き先、取引相手の名前および取引内容などが記載されている。現存する最も古い史料は1770（明和7）年のものであり、以後欠年はあるものの1831（天保2）年までの帳簿が41年分存在している¹²⁾。18世紀の「船勘定控帳」には、出船日時の早い順番で取引の内容が記載されている。しかし19世紀以降の「船勘定控帳」になると、船ごとにインデックスがもうけられるようになった¹³⁾。また、安永中期以前の帳簿には「売」、「売切」や「買」、「買入」といった取引の内容が記載されていないことが多く、天草石本家と取引相手間でどの方向に商品および金銭が移動したかが明瞭ではない。

さらに、同史料に記載されている取引の中には、匁銭（銭匁）勘定という特殊な額面で金額算出がなされている場合がある。【史料1】の「七拾文銭 八百三拾匁」、「十九文銭 四貫五百目」という部分が、この匁銭勘定にあたる。匁銭勘定は、従来主に貨幣史の分野で研究が行われてきており、帳簿上はあたかも銀建てで支払いが行われているように見えるが、実際は銭建てで決済が行われるという、徳川期において主に九州を中心とする西日本で散見される、特殊な勘定である。銭匁勘定の大きな特徴として、匁と銭のレートが各地域で違うことが指摘できる。たとえば、天草石本家が居住した天草では1匁=19銭で計算が行われているが、天草以外の肥後国では1匁=40文、1匁=70文など複数のレートが使用されていた¹⁴⁾。匁銭勘定に関しては、この特殊な勘定がなぜ採用され普及したかも含めて様々

12) 現存している帳簿は、1770（明和7）～1771（明和8）年、1772（安永元）～1780（安永9）年、1781（天明元）～1787（天明7）年、1789（寛政元）年、1791（寛政3）～1792（寛政4）年、1795（寛政7）～1798（寛政10）年、1801（寛政13）年、1806（文化3）～1809（文化6）年、1811（文化8）～1816（文化13）年、1818（文政元年）、1824（文政7）～1826（文政9）年、1830（天保元）～1831（天保2）年のものである。

13) 楠本（2002）、105頁。

14) 藤本（2014）、2頁、135-241頁。

な議論が行われている¹⁵⁾。ここでは、船勘定控帳には匁銭勘定で記載された取引が多くあり、同史料を用いる際には注意が必要であるということを言及しておくに留める。なお、本稿では石本家廻船による取引を数値化する際、この匁銭勘定を含む取引を全て銀建てで統一している。

以後、本稿では商品と売買関係が明確である取引を抜き出し、販売額(商品の売値から取引にかかった手数料を差し引いた金額)、購入額(商品の買値に取引にかかった手数料を足した金額)、取引額(販売額と購入額を足したもの)を算出し分析を行った。また、安永中期以前の史料は、前述のように売買形態や金額などの項目が不記載の場合が多数あり、それらを用いて取引額を算出することが現時点では困難である。そこで、本論文では比較的欠落が少ない安永中期以後の史料(具体的には1779(安永8)年)を用いた。売買関係が明確である取引のみを抽出したため、本稿で示す取引額は概算である点に留意が必要である。

1.3 石本家廻船の概略 一出船回数と取引額の推移

天草石本家は、酒造業で利用する筑後米や肥後米を仕入れる過程で、海運業に進出したとされている¹⁶⁾。同家は、名前がつけられた数隻の船と、天草石本家が所有する「飛船」,^{とびふね}「小・中飛船」と称される数隻の船(以下、飛船と呼称)、および「仮船」,^{かりふね}「伍船」と称される他人船(以下、借船と呼称)を用い、海運業を営んだ。「宝徳丸」,^{とびふね}「大徳丸」,^{かりふね}「幸徳丸」などの名前が付けられた船は700石積程度の大型船と100~300石積程度の中型船に分けられる。また、「飛船」や「借船」は100石積以下の小型船であったと推測される¹⁷⁾。

表1は、石本家廻船の出船廻船および取引地を、船種別に統計したものである。全体の傾向としては、以下の通りである。大型船は、主に瀬戸内海沿岸港や大坂といった九州外の港に出船していた。他方、中型船と小型船は九州内で航海を行い、天草周辺地との取引に従事していた。石本家廻船による船の往来が激しかったのは、文化~文政期(1804~1830年)であった。この時期は、大型船と中型・小型船合わせて年100回以上の出船を行う年もあった。天保期に入ると出船は減少し、大型・中型船による航海は行われなくなった。また、小型船における出船も、浜代としての塩や小作料の受取のための出船が中心となり、商品取引のために船が動かされることはなくなった¹⁸⁾。

注目すべき点として、大型船による出船回数が1780年代頃から減少していることがあげられる。19世紀に突入すると、大型船による出船が1年に1回しか行われない年もあった。しかし、このことは大型船による取引が衰退したことを必ずしも意味していない。図2は、大型船による九州外取引と中型・小型船による九州内取引におけるそれぞれの取引額、および1航海当たりの取引額を表したものである。大型船による取引額の変化に目を向けると、乱高下が激しいものの、18世紀末以降増加トレンドとなっていたことが分かる。1806(文化3)年には、大型船取引において約銀200貫目という最大

15) 近年の匁銭勘定に関する研究では、藤本(2014)や岩橋(2012)などがある。

16) 楠本(2002), 78頁。

17) 大型・中型船の大きさは楠本(2002), 82頁より。小型船の大きさは「船勘定控帳」に記載された「飛船」・「借船」の乗組員数が2~4人であったことから筆者が推測した。乗組員数と船の大きさの関係は、石井謙治(1995), 168頁を参照。

18) 楠本(2002), 80頁, 表1, 82-83頁。

表1 石本家廻船の船種別出船回数の推移

年		大型船			中型・小型船							計(a)	計(b)
和暦	元号	九州外	九州内	計	天草 島内	島原諸 地域	長崎	肥後	筑後	その他	不明		
1770	明和7	3	4	7(7)	13(3)	20(6)	2	13(3)	2	—	6(5)	56	45
1771	明和8	5	3	8(8)	21(3)	23(3)	2(2)	17(11)	4	—	2(2)	69	57
1772	安永元	3	9	12(11)	19(2)	15(6)	7(7)	20(10)	4	—	5(1)	70	70
1773	安永2	2	6	8(8)	27(3)	19(3)	3(3)	20(4)	6	3(3)	2	80	58
1774	安永3	3	1	4(4)	26(4)	20(4)	1(1)	18(6)	4	—	3	72	49
1775	安永4	4	2	6(2)	28(5)	23(7)	2(2)	15(6)	3	1(1)	4(2)	76	54
1776	安永5	4	—	4(4)	25(6)	15(4)	1(1)	12(2)	—	2	3(1)	58	46
1777	安永6	3	1	4(4)	32(7)	21(4)	—	13(6)	5	2(2)	4	74	65
1778	安永7	—	—	—	38(5)	20(1)	2(1)	15(2)	5(2)	2(2)	5	85	75
1779	安永8	1	2	3(3)	30(2)	19(1)	1(1)	11(2)	3(1)	1(1)	3	67	48
1780	安永9	1	2	3(3)	42(1)	20(2)	1(1)	4	5(5)	—	5	77	66
1781	天明元	4	—	n.a.	41(3)	13(4)	1(1)	5(3)	4(4)	—	3	58	n.a.
1782	天明2	2	3	5(4)	27(2)	25(2)	1(1)	14(2)	6(6)	—	—	73	61
1783	天明3	2	1	3(3)	32(3)	10(3)	2	8(1)	7(7)	—	—	59	43
1784	天明4	3	2	5(5)	24(1)	25(3)	1(1)	18(3)	—	—	1	69	57
1785	天明5	3	2	5(5)	43(1)	25(2)	—	10(5)	3	1	1(1)	85	63
1786	天明6	2	—	2(2)	43(3)	24(1)	—	4(1)	—	—	3	74	53
1787	天明7	2	—	2(2)	41(3)	24	—	5(1)	—	7(7)	—	77	63
1788	天明8	3	—	n.a.	44(2)	5	1(1)	9(3)	2(1)	—	1(1)	63	n.a.
1789	寛政元	3	—	3(3)	47(4)	20(5)	—	10	4	3	2	86	50
1790	寛政2	3	—	n.a.	38(2)	13	—	4	—	—	7	62	n.a.
1791	寛政3	3	1	4(4)	53	11	2	—	1	—	4	71	46
1792	寛政4	1	2	3(3)	43(1)	22	1	11(2)	2(1)	—	7	86	40
1793	寛政5	4	—	n.a.	40(7)	20	—	11(2)	—	—	2(2)	73	n.a.
1794	寛政6	3	—	n.a.	28(3)	25(5)	1(1)	16(4)	6(6)	—	2(2)	78	n.a.
1795	寛政7	3	—	3(3)	35(9)	15(1)	1	6(1)	5(5)	1	2	65	27
1796	寛政8	3	—	3(3)	35(9)	23(2)	—	5(3)	—	—	2	65	28
1797	寛政9	2	—	2(2)	18(1)	14(3)	—	14	2(2)	—	1(1)	49	28
1798	寛政10	4	—	4(4)	26(1)	26(1)	—	7(1)	4(4)	—	3(3)	66	23
1801	寛政13	4	—	4(4)	29(1)	18	—	7(1)	7(7)	—	1(1)	62	24
1806	文化3	2	—	2(2)	25(6)	24(7)	1	5(3)	1(1)	—	1(1)	57	33
1807	文化4	4	—	4(4)	33(5)	19(4)	1	6(6)	—	1(1)	5	65	26
1808	文化5	1	—	1(1)	53(4)	50(3)	3	3(2)	—	1	1	111	33
1809	文化6	1	—	1(1)	52(4)	44(5)	2	5(2)	2	2(2)	6	112	50
1811	文化8	—	—	—	40(6)	20	3(3)	2(2)	—	—	5	70	24
1812	文化9	4	—	4(4)	48(2)	53(3)	1	5	—	3(3)	2(1)	112	41
1813	文化10	—	—	—	34(2)	34(3)	3(1)	6(1)	—	—	2	79	27
1814	文化11	4	—	4(4)	9	6	4	6	—	—	—	25	20
1815	文化12	3	—	3(3)	—	1	—	—	—	—	—	1	1
1816	文化13	4	—	4(4)	47	35	6	9	—	—	2	99	41
1818	文政元	4	—	4(4)	45(6)	8(2)	15(4)	8(1)	2	2(2)	4	84	36
1824	文政7	—	—	—	25(2)	16	3(3)	6	3(1)	—	3	56	14
1825	文政8	1	—	1(1)	41	12	5(1)	15	2	1(1)	—	76	24
1826	文政9	2	—	2(2)	39(2)	12	4(2)	4(4)	1(1)	—	4	64	21
1830	天保元	—	—	—	51	39	2	2	4	2	8	108	4
1831	天保2	—	—	—	57	20	2	7	—	2	—	88	5

注1) 大型船の「九州外」は、中国地方、神戸、大阪を、「九州内」は中型・小型船で記した九州内の諸地域を指す。中型・小型船の「島原諸地域」は、島原城下、口之津、須河、有家、千々石、小浜、茂木、樺島を、「肥後」は八代(鏡、植柳、松橋)、川尻、高橋、宇土を、「筑後」は柳川、下田、三池を、「その他」は肥前と薩摩をそれぞれ指す。

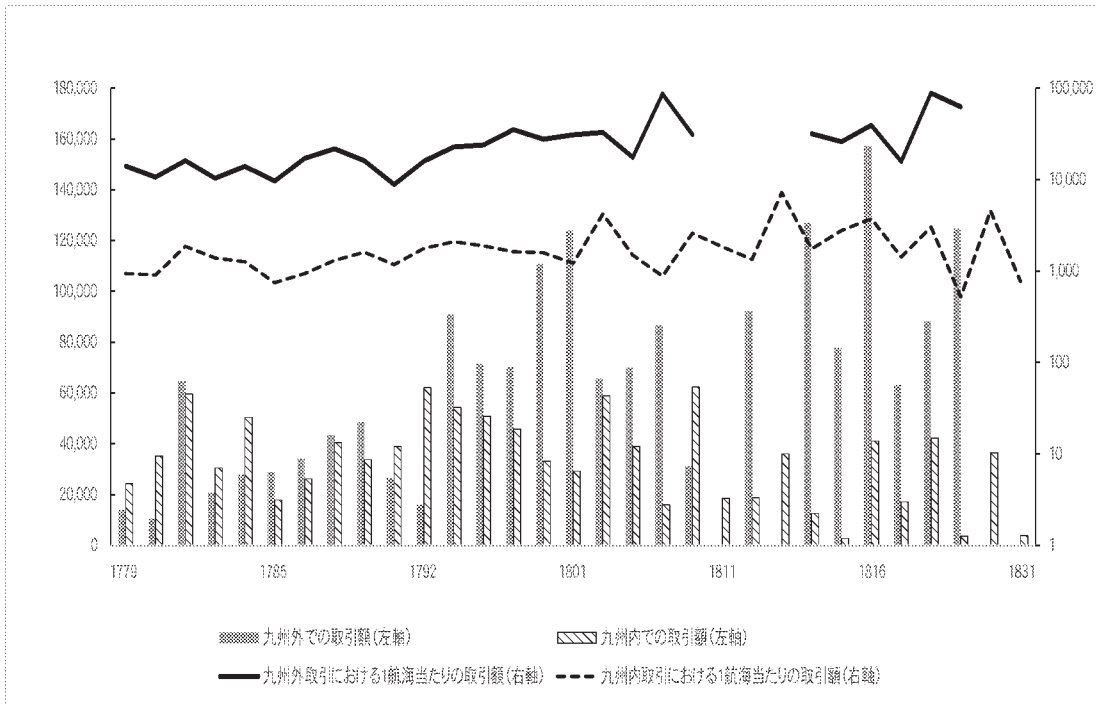
注2) 各項目の単位は回である。

注3) 大型船における「計」の項目の括弧内の数字は、当該年に実際に商品取引を行った出船回数の合計を指す。中型・小型船における各地域への出船回数における括弧内の数字は、中型船による出船を指す。計(a)は当該年における中型・小型船の出船回数を、(b)は当該年における商品取引を行った中型・小型船の出船回数を指す。

注4) 1781(天明元)年、1788(天明8)年、1790(寛政2)年、1793(寛政5)年、1794(寛政6)年に関しては、出船先と回数のみ判明しており、取引を行ったかどうかについては不明である。

出典) 石本家文書「船勘定控帳」(163~181, 263~266, 348~350, 626~630, 859, 904, 5015~5020, 6257, 6267); 石本家文書「船方算用帳」(154, 159, 161, 4946, 4947)。

図2 大型船と中型・小型船の取引額および1航海当たり取引額の推移(匁)



注1) 1航海当たりの取引額は、九州外・九州内の取引額を、実際に商品取引が行われた出船回数で除したもの。

注2) 両軸の単位は匁である。

出典) 石本家文書「船勘定控帳」(172~181, 263~266, 348~350, 626~630, 859, 904, 5015~5020, 6257, 6267)；石本家文書「幸徳丸指控帳」(5036)；石本家文書「幸徳丸仕切銀指引帳」(185)。

の取引額を記録した。また、1航海当たりの取引額も19世紀以降同様に増加している。1790年代半ばに、1航海当たりの取引額が銀30貫目を超えると、それ以降はその規模を維持し、1816(文政13)年には銀35貫目を超える取引額を算出した。つまり、先の大型船における出船回数の推移と照らし合わせると、石本家廻船は19世紀以降大型船の出船回数を減少させるものの、1航海当たりの取引額を増加させることでそれ以前よりも取引額を増加させたのである。

さて、再び表1に目を向け、中型・小型船の出船回数の推移について観察しよう。石本家廻船の九州内での主な取引地は、天草島内の村々、八代(鏡, 植柳, 松橋), 川尻, 高橋などの肥後国西部, 島原城下, 口之津, 茂木などの島原諸地域, 柳川, 下田, 三池, そして天草石本家が出店を開設した長崎である(図1参照)。また、肥前や薩摩にも足を向けていた¹⁹⁾。しかし、表1を見ると、出船先の中心は天草の上島・下島両島, 天草地方の対岸に位置する肥後国西部と島原半島諸地域という、天草の近距離地であったことが分かる。注目すべきは、1818(文政元)年の長崎松坂屋の開設前後から、長崎への出船が増加している点である。長崎に新たに出店が構築されたことで、石本家廻船の活動における同地の重要度が上昇したことをうかがうことができよう。

19) 楠本(2002), 83-84頁。

それでは、もう一度図2に視線を移そう。中型・小型船の取引額は、1810年前後までは平均して約40貫目程度の取引額で推移していたものの、それ以降取引額は減少傾向に陥った。しかし、1航海当たりの取引額の変化に目を移すと、1810年代以降もそれまでの水準を維持していたことが分かる。当然のことながら、中型・小型船による1回の取引量・取引額は、共に大型船のそれと比較して少ない。しかし、時には年100回以上行われた中型・小型船による出船は、出船回数ベースで見れば、石本家廻船の中で重要な位置を占めていた。両船は、小回りが効くという優位性を生かし大型船の場合と比較していわばリテールの取引を行い、九州域内の商品流通の速度と深度を高める役割を担っていたと推測される。

さて、これまで天草石本家および石本家廻船の概略について述べてきた。石本家廻船は、19世以降に入ると、特に瀬戸内海沿岸や大坂へ出船した大型船の活動が牽引する形で、取引額を増大させたことが判明した。当該期には、北前船や内海船などの大規模廻船が、瀬戸内海沿岸地域や大坂などの西廻り航路上の港で活発な取引を行っていた。このような時期に、石本家廻船が九州外で旺盛な活動を行っていたことは大変興味深い。次章では、大型船と中型船・小型船による取引を、主に取引された商品に着目して考察する。そして、主要取引商品の中でも、九州内で取引された貨幣について考察を進める。

2 石本家廻船による商品取引 —貨幣取引への着目—

本章では、まず始めに石本家廻船による商品取引を、大型船による九州外での取引と中型・小型船による九州内での取引に分けて考察する。その際、両取引における主要取引商品の品目とその変化に着目して分析を行う。その後、本稿のメインテーマである九州内における貨幣取引が、石本家廻船の活動において一定の比重を占めていたことを確認し、同廻船による貨幣取引の具体的な事例を紹介する。

表2は、18世紀後半～19世紀前半における、石本家廻船の販売額・購入額の推移を表したものである。表2には、大型船を用いた九州外取引と中型・小型船を用いた九州内取引について、それぞれ各年における販売額・購入額と、取引額の大きかった上位3商品が書かれている。

まずは、大型船の活動に目を向けてみよう。700石積程度であったとされる石本家廻船の大型船は、九州から出船したのち、下関、上関、尾道、玉島、兵庫などの瀬戸内海沿岸港と大坂に寄港し帰帆した。表2から、大型船取引の概要が、九州産の米類や大豆、麦類といった穀物、榎実と生蠟を瀬戸内海沿岸港と大坂で販売し、帰り荷として、日用品や雑貨類、中国地方の線綿や鉄などを購入するといったものであったことが分かる²⁰⁾。しかし、細かく見ていくと、石本家廻船の取引には時系列で変化が見られる。とくに、上位3商品の構成比に注目すると、以下の事実が判明した。

まず、販売取引の方に着目する。表2からは、販売商品の中でも、米類、大豆、榎・生蠟の3商品が、石本家廻船にとって重要だったことが分かる。そして、この3商品の中でも、榎・生蠟が大きな

20) 楠本(2002), 105-116頁。

表 2 石本家廻船による取引額と主要取引商品の変遷

大型船取引

年	販売取引					購入取引			
	1位	2位	3位	上位3商品 以外の割合	合計 販売額	1位	2位	3位	合計 購入額
1779	米類 (50.2%)	大豆 (40.0%)	麦類 (9.8%)	3.7%	4,945	線綿 (44.5%)	雑貨・日用品類 (55.5%)	—	9,067
1780	榎・生蠟 (53.9%)	大豆 (26.2%)	種子 (8.5%)	19.9%	8,325	米類 (75.9%)	雑貨・日用品類 (24.1%)	—	2,345
1782	榎・生蠟 (59.8%)	麦類 (3.3%)	大豆 (2.2%)	—	39,706	線綿 (71.8%)	米類 (1.5%)	雑貨・日用品類 (26.7%)	24,936
1783	榎・生蠟 (88.8%)	麦類 (11.2%)	—	—	13,005	雑貨・日用品類 (100.0%)	—	—	7,681
1784	榎・生蠟 (51.5%)	米類 (23.6%)	大豆 (7.4%)	17.5%	17,871	線綿 (74.6%)	雑貨・日用品類 (25.4%)	—	10,059
1785	榎・生蠟 (35.1%)	米類 (9.3%)	大豆 (7.8%)	45.7%	25,828	線綿 (54.9%)	雑貨・日用品類 (45.1%)	—	3,132
1786	榎・生蠟 (60.4%)	米類 (11.9%)	大豆 (9.9%)	17.8%	20,330	線綿 (62.5%)	米類 (18.8%)	雑貨・日用品類 (18.7%)	13,748
1787	米類 (79.7%)	大豆 (12.3%)	実綿 (6.5%)	1.5%	33,297	線綿 (100.0%)	—	—	10,199
1789	榎・生蠟 (69.0%)	干鰯 (11.7%)	麦類 (4.7%)	14.6%	39,345	線綿 (75.8%)	鉄 (19.1%)	雑貨・日用品類 (5.1%)	9,087
1791	榎・生蠟 (52.6%)	干鰯 (30.3%)	大豆 (11.1%)	6.0%	22,040	線綿 (79.0%)	鉄 (14.4%)	雑貨・日用品類 (6.6%)	4,437
1792	榎・生蠟 (98.4%)	実綿 (1.2%)	麦類 (0.2%)	0.2%	13,016	米類 (100.0%)	—	—	2,913
1795	榎・生蠟 (19.4%)	米類 (19.4%)	麦類 (13.7%)	47.5%	49,128	線綿 (76.3%)	鉄 (13.2%)	雑貨・日用品類 (10.5%)	41,717
1796	榎・生蠟 (62.4%)	大豆 (21.6%)	実綿 (5.3%)	10.7%	48,451	線綿 (76.4%)	鉄 (7.4%)	雑貨・日用品類 (6.2%)	23,203
1797	榎・生蠟 (44.4%)	実綿 (13.6%)	大豆 (7.2%)	34.8%	50,565	雑貨・日用品類 (40.0%)	米類 (34.0%)	鉄 (26.0%)	19,783
1798	榎・生蠟 (55.1%)	麦類 (14.2%)	米類 (12.2%)	18.5%	73,767	線綿 (62.4%)	雑貨・日用品類 (32.6%)	鉄 (5.0%)	37,078
1801	大豆 (35.0%)	麦類 (22.0%)	米類 (16.9%)	26.1%	63,482	線綿 (68.6%)	雑貨・日用品類 (31.1%)	鉄 (0.3%)	60,444
1806	米類 (26.2%)	大豆 (25.6%)	榎・生蠟 (19.2%)	29.0%	44,809	線綿 (50.4%)	雑貨・日用品類 (44.3%)	鉄 (5.3%)	21,041
1807	榎・生蠟 (41.1%)	大豆 (35.4%)	米類 (15.1%)	91.6%	43,847	線綿 (78.5%)	鉄 (13.6%)	雑貨・日用品類 (7.8%)	26,100
1808	米類 (95.0%)	大豆 (4.6%)	麦類 (0.3%)	0.1%	85,274	鉄 (79.3%)	雑貨・日用品類 (20.7%)	—	1,441
1809	榎・生蠟 (79.4%)	大豆 (7.8%)	米類 (2.5%)	10.3%	19,089	雑貨・日用品類 (100.0%)	—	—	12,021
1812	榎・生蠟 (62.5%)	米類 (22.7%)	実綿 (7.7%)	7.1%	38,472	線綿 (69.7%)	雑貨・日用品類 (30.3%)	—	53,781
1814	米類 (50.5%)	実綿 (26.5%)	榎・生蠟 (20.9%)	2.1%	25,724	線綿 (96.3%)	雑貨・日用品類 (3.7%)	—	101,264
1815	大豆 (22.2%)	干鰯 (12.4%)	麦類 (5.2%)	60.2%	37,141	線綿 (73.5%)	米類 (14.2%)	雑貨・日用品類 (12.3%)	40,663
1816	榎・生蠟 (44.0%)	米類 (25.6%)	大豆 (16.6%)	13.8%	71,718	線綿 (97.6%)	雑貨・日用品類 (2.4%)	—	85,480
1818	米類 (25.6%)	大豆 (16.6%)	実綿 (0.3%)	57.5%	28,971	線綿 (89.2%)	雑貨・日用品類 (10.8%)	—	34,257
1825	米類 (95.8%)	榎・生蠟 (4.2%)	—	—	61,775	線綿 (100.0%)	—	—	26,474
1826	米類 (83.1%)	榎・生蠟 (16.4%)	不明 (0.5%)	—	86,752	線綿 (84.2%)	雑貨・日用品類 (15.8%)	—	38,066

注 1) 「米類」とは、御藏米、商人米、餅米を指す。「榎・生蠟」は、榎実と生蠟を指す。「麦類」とは、大麦と小麦を指す。

注 2) 「合計販売額」、「合計購入額」それぞれの単位は匁である。

注 3) 括弧内の数字は、当該年の販売額・購入額において、当該商品の占める割合を示す。

出典) 図 2 と同様。

中型・小型船取引

年	販売取引				合計 販売額	購入取引				合計 購入額
	1位	2位	3位	上位3商品 以外の割合		1位	2位	3位	上位3商品 以外の割合	
1779	塩 (40.3%)	大豆 (14.3%)	酒 (12.2%)	33.2%	13,268	繰綿 (20.2%)	榧・生蠟 (18.9%)	金銀銭 (12.9%)	48.0%	11,139
1780	繰綿 (35.6%)	米類 (22.6%)	酒 (14.7%)	27.1%	11,364	米類 (29.4%)	金銀銭 (18.8%)	繰綿 (11.4%)	40.4%	23,861
1782	繰綿 (55.7%)	塩 (15.3%)	米類 (7.4%)	21.6%	16,042	米類 (45.4%)	金銀銭 (21.2%)	榧・生蠟 (10.6%)	22.8%	43,235
1783	塩 (24.9%)	米類 (23.9%)	酒 (10.9%)	40.3%	12,861	榧・生蠟 (40.5%)	米類 (34.3%)	塩 (9.2%)	16.0%	17,675
1784	繰綿 (49.5%)	麦類 (15.0%)	塩 (14.6%)	20.9%	21,677	金銀銭 (44.2%)	米類 (12.1%)	麦類 (11.2%)	32.5%	28,777
1785	鉄 (33.7%)	塩 (29.8%)	繰綿 (11.6%)	24.9%	5,801	金銀銭 (36.7%)	米類 (15.2%)	大豆 (13.6%)	34.5%	12,122
1786	米類 (25.7%)	酒 (24.1%)	繰綿 (22.4%)	27.8%	2,641	金銀銭 (91.1%)	麦類 (5.6%)	米類 (2.0%)	1.3%	23,618
1787	塩 (47.2%)	大豆 (22.7%)	米類 (12.9%)	17.2%	4,623	金銀銭 (23.7%)	榧・生蠟 (18.6%)	米類 (18.0%)	39.7%	35,912
1789	金銀銭 (67.5%)	麦類 (17.8%)	米類 (7.0%)	7.7%	12,925	繰綿 (27.8%)	金銀銭 (25.3%)	米 (22.4%)	24.5%	20,803
1791	金銀銭 (54.2%)	木綿 (15.8%)	塩 (6.0%)	24.0%	19,154	繰綿 (42.2%)	米類 (16.7%)	大豆 (5.1%)	36.0%	19,773
1792	塩 (35.6%)	繰綿 (24.8%)	大豆 (6.7%)	22.9%	21,146	金銀銭 (27.8%)	榧・生蠟 (17.9%)	繰綿 (7.8%)	46.5%	40,934
1795	米類 (23.5%)	木綿 (22.5%)	繰綿 (14.0%)	40.0%	26,282	金銀銭 (81.5%)	米類 (9.9%)	大豆 (3.3%)	5.3%	27,995
1796	繰綿 (31.5%)	塩 (25.3%)	木綿 (22.5%)	20.7%	18,217	金銀銭 (25.2%)	繰綿 (12.3%)	米類 (4.5%)	58.0%	32,569
1797	金銀銭 (22.1%)	木綿 (20.4%)	塩 (12.6%)	44.9%	13,458	米類 (52.8%)	榧・生蠟 (16.8%)	繰綿 (5.5%)	24.9%	32,338
1798	繰綿 (35.0%)	塩 (27.1%)	金銀銭 (5.0%)	32.9%	10,056	金銀銭 (21.2%)	麦類 (13.1%)	米類 (12.9%)	52.8%	23,144
1801	繰綿 (24.7%)	米類 (17.6%)	金銀銭 (14.8%)	42.9%	12,422	麦類 (36.0%)	米類 (25.8%)	金銀銭 (10.3%)	27.9%	16,875
1806	金銀銭 (62.4%)	繰綿 (24.1%)	米類 (3.0%)	10.5%	36,713	米類 (40.4%)	大豆 (39.7%)	麦類 (19.7%)	0.2%	22,187
1807	繰綿 (66.9%)	塩 (6.3%)	木綿 (1.0%)	25.8%	5,787	大豆 (39.2%)	米類 (35.5%)	木綿 (8.9%)	16.4%	33,200
1808	繰綿 (36.4%)	米類 (18.1%)	木綿 (15.8%)	19.7%	13,021	木綿 (57.7%)	榧・生蠟 (11.3%)	金銀銭 (7.2%)	23.8%	2,879
1809	金銀銭 (54.3%)	繰綿 (21.7%)	塩 (14.6%)	9.4%	37,219	榧・生蠟 (18.7%)	米類 (18.2%)	繰綿 (7.9%)	55.2%	25,099
1811	金銀銭 (67.2%)	繰綿 (7.5%)	米類 (5.6%)	19.7%	14,317	米類 (57.7%)	繰綿 (18.5%)	大豆 (0.7%)	23.1%	4,210
1812	繰綿 (29.7%)	木綿 (25.4%)	大豆 (14.5%)	30.4%	13,262	金銀銭 (35.0%)	麦類 (24.7%)	米類 (1.2%)	39.1%	5,501
1813	大豆 (54.6%)	繰綿 (34.6%)	木綿 (9.9%)	0.9%	11,932	米類 (60.2%)	大豆 (11.9%)	金銀銭 (4.3%)	23.6%	24,127
1814	繰綿 (46.5%)	米類 (29.2%)	不明 (18.2%)	6.1%	6,648	米類 (37.1%)	繰綿 (20.6%)	金銀銭 (6.0%)	36.3%	5,611
1815	木綿 (100.0%)	—	—	—	1,662	繰綿 (57.8%)	鉄 (37.7%)	不明 (4.5%)	—	1,107
1816	金銀銭 (75.1%)	木綿 (15.2%)	米類 (2.7%)	7.0%	22,467	塩 (41.1%)	繰綿 (13.1%)	米類 (2.1%)	43.7%	18,650
1818	金銀銭 (30.3%)	繰綿 (26.2%)	木綿 (26.2%)	17.3%	3,305	繰綿 (71.8%)	榧・生蠟 (9.5%)	金銀銭 (5.8%)	12.9%	13,852
1825	木綿 (91.1%)	大豆 (5.5%)	繰綿 (1.8%)	0.8%	23,925	繰綿 (48.5%)	米類 (10.4%)	金銀銭 (3.4%)	37.7%	18,432
1826	繰綿 (76.9%)	麦類 (23.1%)	—	—	2,706	榧・生蠟 (54.9%)	米類 (17.6%)	麦類 (15.7%)	11.8%	932
1830	金銀銭 (66.8%)	塩 (18.9%)	大豆 (10.6%)	2.8%	9,770	大豆 (32.6%)	麦類 (21.8%)	金銀銭 (21.3%)	24.3%	26,698
1831	金銀銭 (30.1%)	塩 (11.2%)	米類 (3.1%)	55.5%	3,424	苧 (70.0%)	筵 (27.5%)	麦類 (2.5%)	—	444

注1) 「米類」とは、御蔵米、商人米、餅米を指す。「榧・生蠟」は、榧実と生蠟を指す。「麦類」とは、大麦と小麦を指す。
 注2) 「合計販売額」、「合計購入額」それぞれの単位は、匁である。
 注3) 括弧内の数字は、当該年の販売額・購入額において、当該商品の占める割合を示す。
 出典) 図2と同様。

位置を占めていた。表2で示した27年分の取引の中で、櫛・生蠟がその年における販売額の中で最も大きな比重を占めたのは、実に16年にも及んだ。また、櫛・生蠟の販売額が1位となった多くの年で、その割合は6割を超えている。石本家廻船にとって、櫛・生蠟は九州外で販売した様々な商品の中でも大きな存在であった。しかし、19世紀に入ると主要販売商品の内訳に変化が見られる。当該期になると、櫛・生蠟が販売額に占める割合が減少し、代わりに米類と大豆が占める比重が増加している。19世紀以降の12年分の取引の中で、櫛・生蠟が1位を獲得した年は4年であり、明らかに18世紀の頃と比較して販売額の中で占める割合を減少させている。この19世紀という時期は、前章で論じたように、大型船の取引総額と1航海当たりの取引額が、それ以前と比較して上昇した時期であった。すなわち、石本家廻船は九州外での取引規模を拡大させた19世紀において、櫛・生蠟から米類と大豆に販売の軸足を移したことが判明した。

さて、購入商品に目を移してみよう。表2からは、購入商品の中でも繰綿が圧倒的な地位を占めていたことが読み取れる。表2で示した27年分の取引の中で、繰綿が販売額のトップになったのは、実に19年に及んだ。主に大坂で購入した雑貨・日用品類や、石見産を中心とする中国地方の鉄、加賀米などの北国米も年によっては購入額の中で大きな割合を占めていたようだが、恒常的に繰綿のような大きな比重を占めることはなかった。さらに注目して欲しいのは、大型船による取引額が増加する19世紀以降、購入商品の中で繰綿への偏重がさらに高まる点である。当該期に入ると、繰綿の販売額が総販売額の中に占める割合はさらに増加し、平均して約8割に達した。このように、石本家廻船が九州の外で購入した商品は、購入額ベースで見ると、中国地方産の繰綿に大きく偏っていたことが明らかになった。これらの事実から、石本家廻船の九州外取引において、中国地方で生産された繰綿を購入することが重要であったことをうかがうことができる。

次に、中型・小型船による九州内取引に目を向けてみよう。表2を見ると、九州内取引での主要取扱商品は、米類や大豆、小麦といった穀物類、櫛実や生蠟、天草で生産された塩などの九州産物と、備中・備後産を中心とする瀬戸内海沿岸地方で生産された繰綿、大坂で購入した日用品などの、大型船が九州外で購入してきたものの2種類に大別できる。つまり、石本家廻船の九州内取引は、①九州で生産された商品を九州内で流通させる、②九州外で販売する商品の仕入れ、③九州外で購入してきた商品の販売という、大きく分ければ3つの役割を有していたのである²¹⁾。

さて、改めて表2を見ると、上述した商品の以外に、「金銀銭」が九州内における販売・購入の両取引において重要な地位を占めていたことが判明する。表2に記載された31年分の取引において、「金銀銭」すなわち貨幣が上位3商品に登場したのは、販売取引で12回、購入取引で19回にも及んだ。つまり、販売取引では約4割、購入取引では約8割の年で、「金銀銭」が上位3商品に名を連ねていたのである。また、当該商品が上位3商品として登場した多くの年で、「金銀銭」は、販売商品または購入商品の中で1位となっていた。「金銀銭」が上位3商品の中で占める割合も高く、その数字が5割を超えた年も少なくはなかった。これは、貨幣取引の件数自体は年に数回程度と少ないものの、1回の取引額が米類や大豆などの穀物類、塩、櫛や生蠟、繰綿などの他の主要取引商品と比較すると、大きなも

21) 楠本(2002), 115-116頁。

のであったことに起因する。

ここで、石本家廻船による貨幣取引の具体的事例を、2つ紹介したい。

事例① 1791（寛政3）年の借船による貨幣取引²²⁾

借船である喜間八船は、12月13～19日の日程で長崎へ出船した。当地にて、同船は95銭981貫976文を銀9貫453匁6分で購入した。そして、金82両2歩を銀4貫734匁5分で購入した。

事例② 1795（寛政7）年の中型船による貨幣取引²³⁾

中型船である大徳丸は、10月17～23日の日程で島原の樺島へ出船した。当地にて、同船は米90俵と木綿20反を銀2貫781匁7分8厘で販売した。そして、銀2貫739匁を購入した。

事例①から分かるように、出船した石本家廻船が取引先で貨幣の取引のみを行う場合もあった。他方、事例②のように他の商品取引と並行して貨幣を売買することもあったようである。また、事例①が示すように、銭981貫976文という、1度に多額の貨幣を取引することもあった。さらに、紹介した事例から分かるように、取引されている貨幣は金・銀・銭という徳川期に使用された三貨幣全てに及んでいた。先に見た表2における取引商品の推移と合わせてみると、石本家廻船による貨幣の売買が、広範かつ複数の貨幣を取り扱う規模で行われてことが推測できるであろう。

このように、九州内で行われた石本家廻船による貨幣取引は、取引額ベースで論じると決して小さくない規模で行われていた。この貨幣取引は、大型船による九州外での取引とリンクすると同時に、独自に九州内で九州産物を流通させるという、従来論じられてきた石本家廻船の活動とは別のものとして捉えられるべきであろう。徳川後期における海運業者の旺盛な活動と商品取引の活発化については、地方特産物や地方市場の興隆などの観点から、これまで広く論じられてきた。それでは、天草石本家による廻船を用いた貨幣の取引が行われた背景は、果たしてどのようなものが考えられるだろうか。

3 石本家廻船による貨幣取引の背景分析 —長崎松坂屋からの書翰史料を用いて—

前章では、天草石本家が手船を用い九州内で貨幣の取引を行っていた事実を、「船勘定控帳」から確認することができた。具体的な事例でも示したように、石本家廻船による貨幣取引は一度の取引で多額の貨幣を売買するのが特徴でもあった。貨幣の取引額を見ると、貨幣取引は石本家廻船の九州内での活動において、大きな比重を占めていた。それでは、このような多額の貨幣取引を可能とした背景には、どのような要因が潜んでいるのだろうか。石本家文書には、その理由を解き明かすことに繋がる史料が取められている。

22) 石本家文書「船勘定控帳 寛政3年」(629)。

23) 石本家文書「船勘定控帳 寛政7年」(173)。

【史料 2】²⁴⁾

(前略) 当地銭相場之儀も、長崎銭相場ニ而九匁貳分貳厘御座候、金子の儀者六拾四匁壹分位ニハ捌ニ申候間、銭ハ買手少なく御座候、金子ハ買手多く御座候、御地御都合次第金子之方御取立相成方御弁理に御座候間 (中略)

十二月六日

松坂屋詰合中

御年貢方御懸屋詰御衆中様

この【史料 2】は、天草石本家が長崎に置いた出店である長崎松坂屋から天草石本家に送られた書状である。正確な年代は不詳であるが、前述の通り長崎松坂屋が開設されたのが1818 (文政元) 年であるから、それ以降に作成されたものであろう。この史料では、長崎松坂屋が天草石本家に対して長崎における金と銭の相場を報告している。さらに、当地 (長崎) では銭の買い手は少なく、反対に金を買いたい者が大勢いると述べている。そして、都合が付けば金の取立に関して弁理を図るつもりであるということを示している。この史料から、天草石本家が長崎松坂屋と連絡を取り合い、長崎における貨幣相場の情報を入手し、貨幣取引を企図していたことが判明した。

さて、【史料 2】に記載された、長崎の銭相場・金相場に対する長崎松坂屋の認識は、正確であったのだろうか。この史料が作成されたと考えられる、1910年代末～1930年代の大坂における金相場・銭相場をもとに考察してみたい。本来であれば、書翰に記載された長崎における貨幣の相場を用いるべきであろうが、同地における長期時系列的な相場データは存在していない。そこで、比較的良質な相場データが長期的に残っている大坂の例を代用して分析を進める。まず、対象年代前後における金相場と銭相場の長期的なトレンドについて確認する。1780年代半ばに始まった老中松平定信による寛政の改革以降、金相場は上昇傾向 (銀安・金高) となった。これは、松平が行った緊縮財政政策に依るものである。財政出動が抑制されたことにより、有効需要が減少し、大坂から江戸への商品廻着高は減少したため、大坂の受取勘定は減少した。他方、幕府の諸収入・諸藩の貢租米販売代金・大名貸などの主要な内容とする大坂から江戸への賃金移動は、さほど減少しなかった。すなわち、大坂 (銀遣い) - 江戸 (金遣い) 間の収支バランスは江戸の受取超過となるため、金が銀に対して相対的に高値となったのである。しかし、1818～20年に行われた文政の貨幣改鑄により、財政支出の膨張と有効需要の増大が引き起こされた。同時に、大坂から江戸への商品廻着量の増大と、商品取引勘定における大坂の大幅な受取超過が生じた。その結果、これまでとは逆に、物価の上昇と金相場の下落 (銀高・金安) が発生したのである。その後は、天保の改革で再び緊縮財政政策が行われたことで、1840年代半ばまで、再び金相場の上昇が見られたのである²⁵⁾。

他方、銭相場 (銭銀相場) に関してはどうかであろうか。銭相場は、1770年代～80年代に急落して以降は、1840年代半ばまでの長期にわたって 9 匁代 (銭 1 貫文につき) を維持した。しかし、その間全く安定的で銭相場に変動が見られなかった訳ではない。たとえば、【史料 2】が記載された1818年前後に、銭相場は大きな変動を見せている。1780年代末に 9 匁台に突入した銭相場は、1810年代末に下落

24) 石本家文書「書状」(17425)。

25) 新保 (1978), 193-194頁。

を続け、1817～22年には8匁台という低い水準に落ちている。だが、その後は一時的な急騰を見せて1825年には10匁台になったが、ふたたび下落して1836～39年にはまたも8匁台という低い水準となった²⁶⁾。このように、【史料2】が作成されたと考えられる時期は、安定的に推移していた銭相場が上下に激しく変動していた期間なのである。

それでは、前述の金相場・銭相場の動きを念頭に置き、【史料2】書かれた内容を改めて検討してみたい。まず「金子の儀者六拾四匁壹分位」という部分に着目したい。この史料が作成された時期に、長崎における金相場は、1両 \div 64匁1分であったということである。既に述べたように、1818～1820年頃は、文政の貨幣改鑄の影響により金安・銀高傾向が強まっていた。その結果、大坂における金銀相場は、1817年に65匁3分（年平均）だったのが、1820年には59匁5分（年平均）にまで下落した。しかし、その後は上昇傾向になり1820年代～1830年までは、年平均64匁台で推移した。つまり、この【史料2】に記載された「金子の儀者六拾四匁壹分位」という箇所と整合するのは、当該時期であると推測される。それでは、銭相場の方はどうであったのか。【史料2】には、「銭相場ニ而九匁式分式厘御座候」と記載されている。つまり、銭1貫文に対して銀9匁2分2厘であったということであろう。既に述べたように、銭相場は1780年代以降、銭1貫文に対して銀8匁台で安定的に推移してきた。しかし、1822年以降銭相場は急騰し、1825年には10匁台に達したのである。つまり、先に金相場で予測した1820年代～1830年代という時代予測と照合すると、この文書が作成されたのは1820年代前半であると推測できるのではないだろうか²⁷⁾。

このように、【史料2】が1820年代前半に作成されたものと仮定すると、長崎松坂屋が記した内容は妥当なものとなる。つまり、当時長崎では銀に対して金と銭の価格が上昇しており、その結果金・銭に対する需要が上昇していたと考えられる。さらに、長崎では金と銭を比較すると金の方に多く買い手が集まっていたと言うことではないだろうか。そして、このように入手した貨幣相場の情報を利用し、天草石本家は前章で紹介した船を用いた貨幣取引を行っていたと推測される。このことは、前章の事例①で紹介した貨幣取引と、【史料2】に書かれた貨幣相場情報が、ともに長崎に関するものであることから推し量ることができる。つまり、石本家廻船の貨幣取引は各地から送られてきた取引地の相場情報に基づき行われたものであると考えられる。そして、事前に取引地における相場状況や貨幣の需給を正確に把握していたことが、前章で指摘したような、一度に約銭980貫文という多額の貨幣取引を可能足らしめた要因だったのではないだろうか。

おわりに

本論文では、石本家廻船の活動に対して、これまでは指摘されてこなかった貨幣取引を中心に考察を加えた。未だ解明すべき点は多いが、同廻船の活動の一端を新たに解明できたと考える。以下、本論文で明らかにした内容を簡単に論じる。

石本家廻船は、19世紀に入ると出船回数と取引額をともに増加させた。とくに、瀬戸内海沿岸港や

26) 新保 (1978), 194-195頁。

27) 大坂における金相場・銭相場については、新保 (1978), 218-219頁, 表4-11を参照。

大坂に出船した大型船は、出船回数自体は減らしたものの、取引額および1航海当たりの取引額を増やすことで、石本家廻船の取引を牽引した。取引額が増大する19世紀に入ると、大型船の販売取引では、米類・大豆に比重が高まると同時に、櫛・生蠟の比率が減少した。また、購入取引では従来から見られた備中・備後産の繰綿への偏重がさらに高まった。

他方、中型・小型船による九州内取引は、取引額では大型船取引に劣るものの、頻繁に九州内を行き来し域内における流通速度と深度を高めることで、大きな役割を担った。そして、石本家廻船による貨幣取引は、この九州内取引において盛んに行われていた。石本家廻船の貨幣取引は、販売と購入どちらも行われており、取り扱われた貨幣も金・銀・銭の三貨に及んだ。貨幣取引は、取引額ベースで見ると九州内取引で大きな比重を占めており、これまで論じられてきた九州産物や九州外から購入してきた商品の流通という石本家廻船の活動と同様に、天草石本家にとって重要なものであった、石本家の貨幣取引は、具体的事例で示したように一度の取引で多額の貨幣が扱われていた。これを可能とした要因として、石本家が取引地における貨幣相場に気を配り、それらの情報を得て取引を行っていた可能性を、長崎松坂屋から送られてきた書翰史料をもとに指摘した。なお長崎以外の取引地からの相場情報を記した史料の発掘と、その情報と実際に行われた貨幣取引との突き合わせが課題として残っているものの、天草石本家が各地における各種貨幣の需給を把握しようと努め、それを手船による貨幣の売買に利用していた可能性は高いであろう。取引地における貨幣相場を正確に把握していたことが、正確な相場情報を入手していないがために発生する取引の不成立というリスクを回避することに繋がり、多額の貨幣取引を成立させた要因として働いたと考えられる。従来の研究では、石本家廻船のように遠隔地間での買積取引を行う廻船にとって、各地における商品の相場情報が重要であり、それらを入手するために遠隔地からの取引相手や同業者である廻船とネットワークが構築されていたことが指摘されてきた²⁸⁾。石本家廻船は、そこに新たに貨幣の相場情報を取り入れた海運業者であると指摘できるだろう。それと同時に、地方特産物といった従来論じられてきた海運業者が主に扱った品物だけではなく、「商品」として貨幣を扱い売買していたという今までに見られなかったタイプの海運業者であると言える。

最後に、今後の展望を記すことで、本稿の末尾としたい。筆者は、石本家にとって手船を用いた貨幣の取引は、自らが所有する資本金の運用を行う意味があったのではないかと推測している。すなわち、同家は各地における貨幣の相場情報を入手し、それに基づき金・銀・銭の三貨を換金することで、差益を獲得しようと画策したのではないだろうか。また、相場情報に基づく廻船を用いた貨幣取引は、資金を特定の貨幣で保有するのではなく三貨に分散して所持することで、特定の貨幣の値崩れが発生したときに損害を最小限に留めるといふ、いわゆるリスク・ヘッジの意味合いもあったのではないだろうか。この点に関しては、より詳細な検討を必要とするため、今後の課題としたいと思う。

一 次 史 料

石本家文書「船勘定控帳」(163~181, 263~266, 348~350, 626~630, 859, 904, 5015~5020, 6257, 6267)

石本家文書「船方算用帳」(154, 159, 161, 4946, 4947)

28) 高部 (1996)。

石本家文書「幸徳丸指控帳」(5036)
石本家文書「幸徳丸仕切銀指帳」(185)
石本家文書「書状」(17425)

参 考 文 献

- 安藤保「近世後期石本家と薩摩藩の関係について」『九州文化史研究所紀要』(九州大学付属図書館付設記録資料館九州史料部門), 第45号, 2001年3月
- 石井謙治編『日本海事史の諸問題 海運編』文献出版, 1995年
- 同『和船Ⅰ』法政大学出版局, 1995年
- 五和町町史編纂委員会『五和町町史』五和町, 2002年
- 岩橋勝「近世貨幣経済のダイナミズム」『社会経済史学』(社会経済史学会) 第77巻第4号, 2012年2月
- 上村雅洋『近世日本海運史の研究』吉川弘文館, 1994年
- 大村要子「近世長崎に於ける貿易業」『九州文化史研究所紀要』(九州大学付属図書館付設記録資料館九州史料部門), 第3・4号, 1953年3月
- 尾道博「対馬藩における流通網について」(柚木編『九州水上交通史』(日本水上交通史論集第5巻)), 文献出版, 1993年
- 楠本美智子「近世商品流通に関する一考察」『九州文化史研究所紀要』(九州大学付属図書館付設記録資料館九州史料部門), 第46号, 2002年3月
- 斎藤善之『内海船と幕藩制市場の解体』柏書房, 1994年
- 同「近世的物流構造の解体」(歴史学研究会・日本史研究会編『近世の解体』(日本講座7)), 東京大学出版会, 2005年
- 新保博『近世の物価と経済発展』東洋経済新報社, 1978年
- 高部淑子「北前船の情報世界」(斎藤善之編『新しい近世史』), 新人物往来社, 1994年。
- 千々布祐貴子「近世筑前の廻船業」(柚木編『九州水上交通史』(日本水上交通史論集第5巻)), 文献出版, 1993年
- 豊田寛三「幕末・維新期の九州廻船と安芸国忠海港」(柚木編『九州水上交通史』(日本水上交通史論集第5巻)), 文献出版, 1993年
- 中西聡『海の富豪の資本主義』名古屋大学出版会, 2009年。
- 中野等「幕藩成立期の領収米流通」『交通史研究』(交通史学会), 第12号, 1984年12月
- 同「18世紀豊前中津における海運の展開」, 『日本歴史』(日本歴史学会), 第478号, 1988年3月
- 藤本隆士『近世匁銭の研究』吉川弘文館, 2014年
- 宮崎克則「豪商石本家と人吉藩の取引関係」『九州文化史研究所紀要』(九州大学付属図書館付設記録資料館九州史料部門), 第45号, 2001年3月
- 宮本又郎・上村雅洋「徳川経済の循環構造」(速水融・宮本又郎編『経済社会の成立』(日本経済史1)), 岩波書店, 1988年
- 柚木學『近世海運史の研究』, 法政大学出版局, 1979年
- 同編『日本水上交通史』(全6巻), 文献出版, 1986-1996年
- 吉田道也「石本家略史」『九州文化史研究所紀要』(九州大学付属図書館付設記録資料館九州史料部門), 第3・4号, 1953年3月